

日本と世界の学術界の未来

国際活動担当副会長 武内和彦

1. 孤立した学術から連携する学術へ

個別学術分野の連携による学際研究から、学術と社会が連携する超学際研究（transdisciplinary research）へ

地球規模課題の台頭により、超学際研究では、国際連携による課題解決へのアプローチが不可欠

欧米やアジアの学術界との連携の経験を活かし、さらに中近東、中南米、アフリカとの連携の強化

2. SDG s を通じた学術と社会の連携

先進国、新興国、途上国が共通の目標を持つことの意義を踏まえ、ODA 等の既存の枠組みを超えた国際連携の推進

日本と世界の学術界、官界、産業界、NGO 等が、SDG s という共通言語で対話を促進（国連を緩やかな連携の場として活用）

気候変動枠組条約パリ協定、生物多様性条約ポスト 2020 年目標、仙台防災フレームワーク等と SDG s の統合的アプローチ

3. 世界における日本の学術のあり方

量の多さを追求する目標から、質の高さを追求する目標への転換と、それ

を客観的に評価できる指標の提示が必要

世界から信頼され、尊敬されるような日本の学术界のポテンシャルを最大

限生かす、科学技術外交の展開

国際的な学术界でリーダーシップを発揮できる能力をもった人材の発掘と

育成が重要（とくに女性研究者）

4. 国際社会におけるユニティとダイバーシティ

世界が共通して挑んでいく課題と、地域的に固有の解決が求められる課題

の識別と、それぞれの地域での融合

自然、社会、経済に加えて、地域の文化の活用や新たな社会の創造をめざ

した新たな価値創造